



SCB

ニュース&トピックス

No.2024-74

(2024. 9. 13)

信金中央金庫 地域・中小企業研究所

研究員 西 俊樹

03-5202-7671

s1000790@FacetoFace.ne.jp

データで読み解くこれからの信用金庫経営 (17) 財務レバレッジ

— 純資産と負債のバランスは重要 —

ポイント

- 2023年度の全国信用金庫の自己資本比率は、前期比0.09ポイント上昇の12.75%、財務レバレッジは前期の20.6倍から19.5倍へ低下した。
- 業態別では、信用金庫の財務レバレッジは、都市銀行、地方銀行、第二地方銀行に比べ最も低い水準で推移している。
- 信用金庫別では、2期間比較（2019年度と2023年度）で財務レバレッジを確認したところ、上昇215金庫、低下39金庫と、上昇金庫が多い状況である。

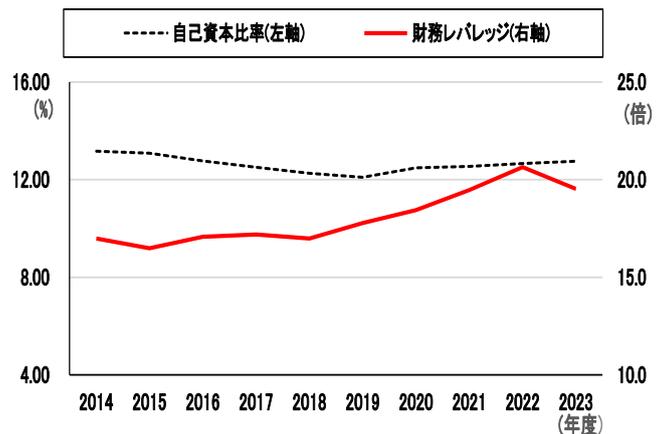
1. 自己資本比率・財務レバレッジ(全国)の状況

2023年度の全国信用金庫の自己資本比率(自己資本の額/リスクアセット等の額の合計額)は、前期比0.09ポイント上昇の12.75%となった。

本稿では、安全性分析の観点で自己資本比率に加えて、財務レバレッジ¹(純資産に対する総資産の倍数)を取り上げる。

財務レバレッジは、2019年度以降上昇傾向であったが、2023年度は純資産の増加率が総資産の増加率以上であったため、前期の20.6倍から19.5倍へ低下した(図表1)。

(図表1) 自己資本比率・財務レバレッジ(全国)の状況



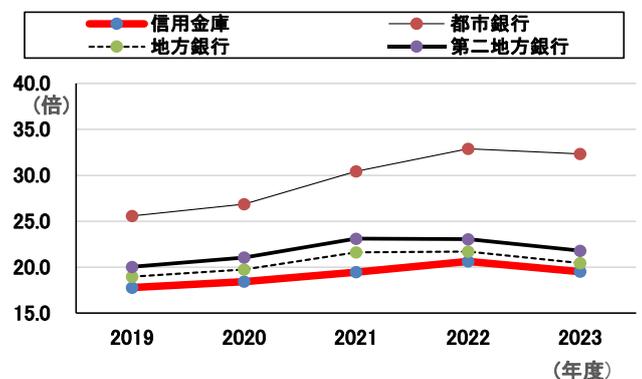
(備考) 信金中央金庫 地域・中小企業研究所作成

2. 業態別財務レバレッジの状況

業態別に、近年5年間における財務レバレッジの推移を示す(図表2)。

信用金庫の財務レバレッジは、都市銀行、地方銀行、第二地方銀行に比べ最も低い水準で推移している。

(図表2)業態別財務レバレッジの状況



(備考) 1. 信金中央金庫 地域・中小企業研究所作成
2. 他業態は全国銀行協会「全国銀行財務諸表分析」より作成

¹純資産を梃子(レバレッジ)にどの程度負債を活用しているかを示す指標

3. 信用金庫別財務レバレッジの状況

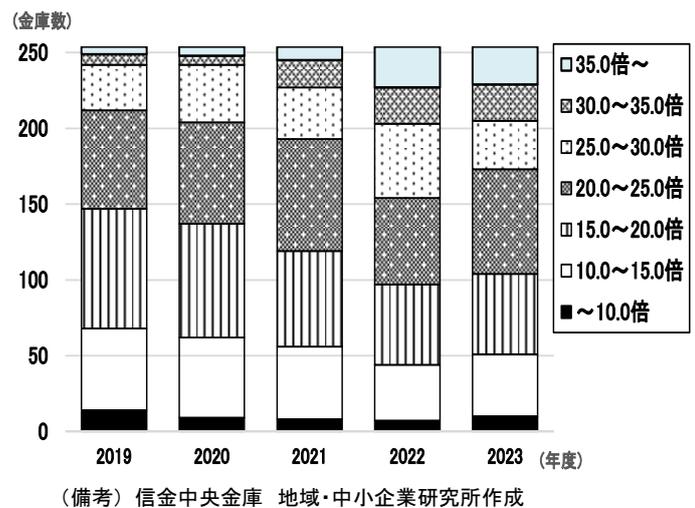
信用金庫別に、近年5年間における財務レバレッジの推移を示す(図表3)。2023年度は、20.0倍以下の信用金庫が最多であるが、一方で35.0倍超の信用金庫が増加するなど、信用金庫間での差が拡大しつつある。

また、2期間比較(2019年度と2023年度)で財務レバレッジの動きを確認したところ、上昇215金庫、低下39金庫と、上昇金庫が多い状況となっている。

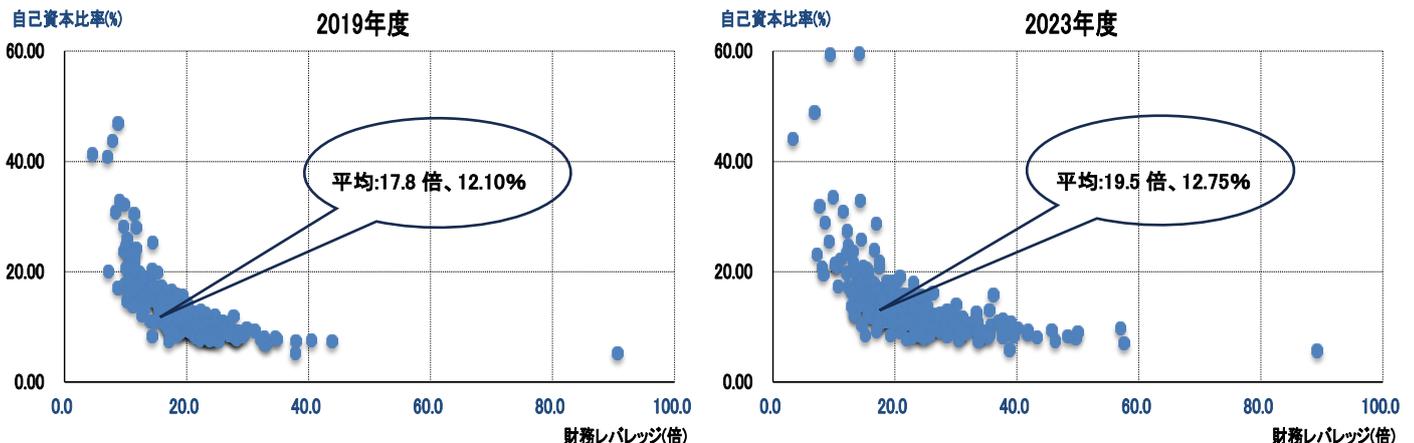
次に、財務レバレッジと自己資本比率を用いて、2期比較(2019年度・2023年度)における個別信用金庫の状況を示す(図表4)。

図表4のとおり負の相関関係がみられるなど、総じて自己資本比率が高い信用金庫ほど財務レバレッジは低くなっている。平均的には、2019年度は財務レバレッジ17.8倍、自己資本比率12.10%、2023年度は財務レバレッジ19.5倍、自己資本比率12.75%と上昇した。

(図表3)信用金庫別財務レバレッジの状況



(図表4)自己資本比率・財務レバレッジの状況



本稿では、安全性分析の観点で自己資本比率および財務レバレッジを取り上げた。信用金庫別にみると、総じて自己資本比率が高い信用金庫ほど財務レバレッジは低い傾向がみられたことから、安全性においては、内部留保の蓄積と預金獲得による業容の拡大、すなわち純資産と負債のバランスは重要であると考えられる。

以上

※信用金庫業界の各種データは、信金中央金庫 地域・中小企業研究所ホームページの「信用金庫統計」(<https://www.scbri.jp/publication/toukei/>)に掲載されています。併せて、ご活用ください。

本レポートは発表時点における情報提供を目的としており、文章中の意見に関する部分は執筆者個人の見解となります。したがって、投資・施策実施等についてはご自身の判断をお願いします。また、レポート掲載資料は信頼できると考える各種データに基づき作成していますが、当研究所が正確性および完全性を保証するものではありません。なお、記述されている予測または執筆者の見解は予告なしに変更することがありますのでご注意ください。